



●小論文〈G類音楽(音楽学)〉〔後期日程〕 東京学芸大'01

次の文章は昭和12年(1937年)に著されたものである。著者の兼常清佐(1885-1957)は20世紀の前半に活躍した音楽学者・評論家である。一般に、今日我々が受容する音楽の多くは、過去の異なる社会構造のなかで生まれ伝承されてきたものである。60余年前に示された著者の問題意識を踏まえ、過去に生まれた音楽を今日受容することについて、あなた自身の考えを自由に述べなさい。(字数制限なし。一枚で書ききれないときは二枚目を用いること。)

音楽の歴史は極めて古い。この三千年の間にいろいろな音楽がいろいろな人々のために作られた。彼らはみなその音楽によって心を慰めた。音楽の歴史は一面では人間の享楽の歴史である。

音楽の歴史は人間の享楽の歴史ではあるが、しかしその享楽のしかたは音楽を聞く人々の間で必ずしも一致していない。また時代々々で必ずしも一致していないようである。

私は今ベートーヴェンを例にとって見る。ベートーヴェンは大きなシンフォニーを九つも作った。そしてそれは今日まで音楽の世界の最大な宝とされている。大芸術だと言われている。そして今日まで多くの批評家や学者が、それについてたくさんの論文を書いた。そしてそれはあるいは人間の運命の闘争を描いたり、あるいは英雄の悲劇的な生涯を描いたり、あるいは自然を讃美したりした誠に意味の深い大芸術だと言った。それで私共はそれを聞く時には、いつも深い尊敬の感情をもって予言者の宣託でも聞くように、畏れ謹んで聞かなくてはならないようになっている。

しかしこれがはたしてベートーヴェンの音楽の本当の意味であつたであろうか。ベートーヴェンを保護してその音楽を作らせたものはリヒノフスキーやロブコーウィッツのようなウィーンの貴族である。ベートーヴェンの音楽は大部分このような貴族のために作られたものである。ベートーヴェンのシンフォニーをまず最初に聞いて享楽した人はこのようなウィーンの貴族たちである。そうするとウィーンの貴族は、今ロマン・ローランが聞くようにベートーヴェンを聞いたであろうか。

もちろん、そのような事は考えられない。彼らはただその心を楽しませ、耳を楽しませるためにこそベートーヴェンに注文してそのシンフォニーを作らせた。そしてそれを聞いてのどかな数時間を費した。当時の音楽界の状況は今日からでは正確にはわからないが、今私共が非常な尊敬の感情をもって、畏れ謹んで彼のシンフォニーを聞いているのとは、かなり様子が違っていたであろう。

(中略)

ベートーヴェンの音楽は、いつから私共が今教えられているようなすばらしい芸術的の意味をもって来たか、これは芸術史上の一問題である。しかしともかく今日ではベートーヴェンの音楽はただ私共の耳を楽しませるというだけのものではなくてきた事は事実である。ワーグネルやローランなどのベートーヴェン論は恐らくその代表的なものであろう。ベートーヴェンの音楽にはこの百年の間に、彼自身も彼の保護者も知らなかった或るものがそれに附け加わっているように見える。

(杉本秀太郎編『音楽と生活—兼常清佐随筆集—』より)